

『なぜ捨てられるのですか』

聖書 マルコによる福音書 15章 33~41節 讃美歌 12 297 298 300 24

説教 森田幸男牧師

今このように共に礼拝をささげている私たちは、イエス・キリストを主、おのが救い主と信じている者が殆どであります。そう信じている主イエス・キリストを自分の気持ちに一番合うように告白するとすれば、どういう表現になるか。或いは別の言い方をすると、私たちはなぜイエス・キリストというこのお方に惹かれるのか。その惹かれるわけが各自にあると思います。それを私たちは各自、心の一番奥に秘めていると思うのですけれども、それが私たち各自の信仰だと言っていいと思います。

今日の聖書の箇所を、もし教理的な表現で表すとすれば、やはり「贖罪」ということになります。罪を贖うということが、今日の箇所のテーマになると思います。そういうことではありますが、別に教理的な表現でなくて、自分にとってイエス・キリストはどういうお方で、何故自分がイエス・キリストに惹かれるのであるか。各自やはり自分が抱えているその信仰と思いと表現が大事なのだと思います。

そういうことで振り返ってみまして、わたしは何故イエス・キリストに惹かれるのか。それはやはり、その限りない憐れみ、或いはその限りない思いやりを持ちたもうイエス・キリストに自分は惹かれている。この「思いやる」という言葉ですが、ヘブライ人への手紙の4章の15節に、「この大祭司は(イエス・キリストのこと)、わたしたちの弱さを思いやることのできないような方ではない」という表現があります。この「思いやる」という言葉は、「苦しみを共にする」という言葉なんですね。

私たちはそれぞれ自分の問題を持っています。問題のない人はおりませんけれども、そのことの故に私たちは苦しむ者であります。また、心が暗くなる者であります。そして、時に非常な孤立感を覚える者であります。そのような時に、その痛み、言わずに言われない思いを共に担ってくださる、共に苦しんでくださる存在としてイエス・キリストがおられる、ということに思いが至った時、私たちはもう一度元気を取り戻すのです。そういう経験をわたしは繰り返して来たと思います。

この講壇からも幾度か申し上げたことがある森有正という人がいます。その人の『いかに生きるか』という本が講談社の現代新書で、もう何十年も前に出ている本で、今でもジュンク堂に行けばあります。今朝のテレビで其処のジュンク堂が映っていましたが、中之島の図書館よりもたくさん本を置いている書店。よその本屋で売れない本も売っているというので、売り上げが他の書店の倍になっているそうです。だから全国で一番売れている本屋のようですね。この本は今でも700円前後だと思いますけれど、この中に、講演とか説教が四編収まっています。四つ目に、「生きるための信仰」という説教があるのですが、森

有正氏はその書いたもの、講演等で、キリスト者のみならず、多くの人の、ある意味で日本の思想的リーダーと評しても良い人だとわたしは思っておりますが。

彼がその説教の中で、「自分が夜明け前に見る夢、それはなんとも暗い夢で、それを繰り返しみる」と言っています。“夜明け前の夢”というので意味があって、私たちは一日一杯働いてグタツと疲れて寝ますが、夜明けに向かって疲れが取れ、眼が覚めて働くわけです。そういうわけで、夜明け前というのは自分が一番自分になっている時だと彼は言います。その時に見る夢が何とも暗い夢で、起きて働くという意欲も何も全部つぶされるような夢を繰り返し彼は見たそうです。そんな中で、どうしてもう一度起き上がって意欲を持って働くことができるか。結論を言いますと、それは自分の罪が赦されているんだ。自分の罪が赦されるというところに、キリストという存在があるんだと。そしてそのキリストという存在は、確かに一人の人ではあるのだけれども、それは本当に独特なユニークな人格なんだと、こういうわけなんです。そういう仕方では彼は自分の信仰告白をしているわけなんです。そういうことでありまして、繰り返し絶望に陥る自分が、如何にして再起できるのか、その心の秘密を素直に言い表しています。こんなことで、その一篇の説教を読むだけでも、非常に値打ちものだと思いますので、お勧めをしておきたいと思います。

私たちは普通の人間ですが、悩みだけは一人前です。非常に苦しい日々を繰り返して生きています。本当に暗い思いに閉ざされて、足を踏み出すことができないようなことが本当に起こるわけです。それが人生というものですね。

そういう人生の日々において、わたしにとっても、昨日も今日も、従って明日も、そしてとこしえに、共にいまして、思いやりたもうイエス・キリスト、それがわたしにとっての主・イエス・キリストであります。

先ほど讃美歌 12 番で、「とうときわが神よ、くらぶるものなき主よ」と、こういうふうには 1 節を歌い出しました。イエス・キリストの御人格は、くらぶべきものがないのです。そういう比類なきものを、“聖”という言葉で表します。「聖書」という言葉の「書」はこれは書物なんですけれども、“くらぶべきものがない書物”という意味で、「聖書」と呼ぶわけです。

今日の聖書の箇所でも、イエス・キリストの死刑執行人のローマの百人隊長が、イエス様が息を引き取られた後、言います。「その百人隊長がイエスの方を向いて、そばに立っていた。そして、イエスがこのように息を引き取られたのを見て、『本当に、この人は神の子だった』」と。彼はイエスが捕らえられて以来の、息を引き取るまでの間、死刑執行人の長としてずっとイエスに伴い、その様子を見続けて来ました。そしてその人が、「本当に、この人は神の子だった」と。このように言うほかない、独特な人格、イエスに彼は出会ったのだと思いますね。

ルカによる福音書が記すあの犯罪人の一人も、「イエスよ、どうかあなたの御国においてになるときは、わたしを思い出してください」と嘆願いたしました。イエス様がやはり御国の権威を持つ方なのだとすることを、自分も十字架に架けられながら、そばでイエス様に触れて、“このお人は違う”と感じた。自分たちはした事の報いとして死刑となっても

当然だけれども、このお人は違うと、そういう犯罪人の思いが表れておりますね。

先週ヨハネによる福音書を読みました。総督ピラトとイエス様とのやり取りを一番詳しく報じているのが、ヨハネによる福音書ですね。そして、ピラトをして三度も、「この人には罪がない」「この人は正しい人だ」「この人には罪がない」ということを、ユダヤの総督ピラトに言わせております。ですから色んな立場の人が、イエス・キリストの尋常ならざる人格に触れ、異口同音に、その独自さを告白しているのだと思います。

いずれにしても私たちはイエス・キリストの生涯というものは、本当に筋の通ったものであり、そこに貫かれた真実というものを覚えます。勿論私たちは福音書をとおしてそれを知るしかないのですけれども、そういうものを感じます。

この間も触れたことでありますけれども、なぜ聖書に四つの福音書があるのかなーと思います。マルコの福音書に書いてないことをルカは書く。マタイは書く。ヨハネは書く。やはりその全体から、四つの福音書からイエス・キリストのお姿が浮かび上がって来るということを、今回も感じました。マルコによる福音書が最初に書かれた福音書と言われるのですが、誕生物語は全くありません。そんなものは全部カットなんですね。そして、主イエスはバプテスマのヨハネから洗礼を受けられた。そしてヨハネが捕らえられたことを聞かれて、伝道に立たれたと。もうすぐに公生涯にずっと入るんですね。それですぐに何をされているかという、ペトロ、ヤコブ、ヨハネを弟子になさった。そして、マルコ福音書が書いているのは、イエス様がなされたのは、人々の病のいやしなんです。

マタイによる福音書なら「山上の説教」が5,6,7章も最初に出て来ますけれども、その後にイエス様の御業のことが出てきますが、マルコは最初からポンとイエス様の奇蹟といつか癒しの業を、もう1章の21節から書いているのです。そして昔は不治の病と言われたような病の人と会われる。また、そういう人が連れて来られる。そしてイエス様はそれらの人々をことごとくいやされるわけです。その当時、そして近年まで不治の病と言われてきたもの、そういう病気もあります。特にハンセン病などはその一つの典型ですけれども、今なら治すための薬などもあるわけですが、イエス様の場合は、今から二千年も昔に、出会われた病者のすべてを癒されるんですね。

何故、それがイエス様には可能なのだろうか？それは、今でも日本だけで見れば不治の病で、長く生きられないという人でも、アメリカへ行って手術を受けたらまだ生き延びられるというふうなケースがいくらもありますね。でもそれを受けるには、ものすごくお金がかかる。そのために皆の善意で何億かという募金が集まって、それをもって子供に手術を受けさせて元気になったという例が時々あります。“ああ、皆やはりこんなことのためにはお金を献げるのだ”と感動を覚えるのですが、日本だけならどうにもならないものでもアメリカに行って治療を受けたら生きることができるといようなことがあります。

ところがイエス様は、ご自分が持っておられるもののすべてと、神が持っておられるもののすべてを、一身に集めて、その一人の人に惜しげなくそのすべてを、集中的に注がれるので、癒しが起こったのです。そういうふうには言えないでしょうか。

今回マルコによる福音書は最初からいやしに突入しているなという感じで、読み直した

のですけれども、正に一人の人がその捕らわれから解かれて、もう一度自由を得て生きることが出来るためには、イエス・キリストは、この世界にあるもののすべてなんです、あらゆるものを呼び集めてその人に注ぎこまれるのです。イエス様という御方はそういう御人格なのだとなわたしは思ったわけでありませう。

それで今日の箇所とのからみで、イエス様の御生涯についてはいろんなことが言えるわけですけれども、もし「イエス様の生涯の特質、特徴の際立っているものを一言で言え」という問題を出されたら、何と答えるかと思ひめぐらして、わたしは、「ああ、イエス様の生涯は、償いの生涯だったのだ」と、そういうふうに新たに思い至って、わたしは得心がいったという思ひです。それを「贖罪」とか「和解」とか言うのですけれども、そういう表現ではピンとこない人があると思ひますけれど、“ああ、イエス様は償いの生涯を生きられたのだ”と。それを、贖罪とか和解とかいう言葉で教理的に言い表しているわけですね。

「償い」というのは、何か過ちとか犯罪行為があれば、それに相応しい代価を支払うことですね。贖う(あがなう)というのも同じ意味です。人に与えた損害は賠償する、「損害賠償」という言葉がありますけれども、人をあやめたらそれ相応の刑に服さないといけません。そういうのが償いの行為であります。

それでは、イエス様の生涯が償いの生涯だったとはどういうことか？イエス様の生涯はその始めから、最後、息を引き取られるその時までのすべてが、この償い、贖いであった。

「償いの生涯」とはそういうことであります。第一に、イエス様はベツレヘムの馬小屋でお生まれになりました。そして十字架で亡くなられた。象徴的な人生の始めと終わりです。ところがこのお生まれの事情はマルコによる福音書には全く書かれていないのですが、マタイによる福音書の2章によりますと、その当時のユダヤの王ヘロデが、外国人も拝みに来るような王が生まれたということに恐れをなして、ベツレヘムとその周辺一帯にいた2歳以下の男の子を一人残らず殺させたことが、書かれております。

ですから、平たく申しますと、人々にとってはいい迷惑なんですね。イエス様が生まれたばかりに、罪もない、同世代から一歳違いぐらいの男の子が皆殺しになったというわけなんです。しかもその前に、「そういうことになるから、エジプトへ逃げなさい」ということを、ヨセフ、マリアには夢で御使が伝えておいて、その後、ベツレヘム一帯の2歳以下の男の子が皆殺しになるというふうなことが起こっているわけなんですね。そのことはエジプトに逃げていたヨセフもマリアもイエス様も知るところではなかったと思ひます。今のように世界の果てで起こったことでもアツという間に伝わる時代ではなかったわけですから。それからまた夢のお告げで、「あなたの命を狙っていたヘロデ王が死んだから戻りなさい」という御使の導きで戻ってくるわけですね。そして結局ナザレに居を定めて、そこで成長されて、30歳まで過ごされるという経過なんですけれども、イエス様は長じて、自分がそのようにして生き延びたけれども、自分の誕生、出生を巡ってそれほど多くの者が虐殺されたということを知られた。イエス様ともあろう方がそのことを知らないままで過ごされるということは、これはあり得ないことですね。

それを知ったイエス様はどう思われたでしょうか。何もイエス様が悪いことをされたわ

けではありません。けれどもご自分の出生を巡って、自分の地位が危なくなるかもしれないと思ったヘロデ王は、それらしき男児を皆殺しにしたというわけです。

よく戦争体験者の80代になったような人は、戦友が殆ど死んでいるのに自分が助かったことに、物凄い負い目を感じて生きていますね。だから戦友が皆生きていればしたであろう事を自分がしなければならないという、悲壮な使命感をもって生きている人たちがおられますね。だからイエス様もこの「ベツレヘム男児大虐殺」ということを知られた後、物凄い心の負担をお感じになったと思います。そしてそれをずーっと胸に秘めて30歳まで過ごされた。ですから逆に想像しますと、良く分らないイエス様の30年の歩みというのは、そのことを胸に秘めて歩まれた。そして横暴な力によって痛めつけられている者がいたら、イエス様は日ごろおとなしい、やさしい人だったけれども、そういうのを見たらいきり立たれなかったかもしれないけれども、許されなかった。そういうふうなことで、30年を過ごされたのではないのでしょうか。

そして、イエス様がヨハネから洗礼を受けられた時、天からの声がありました。聖霊が鳩のように降って、「あなたはわたしの愛する子、わたしの心に適う者」という声が天から響くわけです。この言葉は、簡単な言葉なんです、前半は詩編第2篇7節から、後半はイザヤ書42章1節から引かれております。詩篇第2篇は王の即位の歌です。「あなたはわたしの愛する子、今日、わたしはあなたを生んだ」と神が言われて、王に就かせる。そういう詩編なんです。そしてイザヤ書42章の方は、「わたしの心に適う僕」、あの「苦難の僕」の召命のところなんですね。そして彼は、「傷ついた葦を折ることなく、ほのぐらい灯心を消すことなく、真実をもって道をしめす」(口語訳) そのような苦難の僕なんです。そして彼は遂に道を地に確立するのです。そういう王の即位と苦難の僕の召命の、その言葉がイエス様に臨んだわけです。

そしてイエス様はこの言葉を通してご自分の償い、償いは自分が犯した場合、それを償うわけですがけれども、イエス様の場合は、自分で何か罪を犯されたというのでは勿論ないわけです。けれども自分の出生を巡って、これだけの罪無い者が殺されたということ、知らん振りでは生きておられない。そして今、洗礼の時にそういう天来の言葉を聞かれて、伝道に立たれた、こういうことあります。

そして今日の箇所は十字架上の七言の第四番目、「エロイ、エロイ、レマ、サバクタニ。」これはアラム語ですけれども、ヘブライ語の方だと少し違うのです。これはエリヤを呼んでいると誰かが聞きちがえているように、ヘブライ語なら「エリ、エリ、ラマ、サバクタニ」となるわけです。今書いてあるのがアラム語とあって、ヘブライ語と似ているのですが、当時のイエス様たちが使っておられた言葉はアラム語と言われています。けれども旧約聖書を見ると、「エリ、エリ、ラマ、サバクタニ」となっているわけですがけれども、「わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか」と、十字架上の七言の中では最も痛切な叫びだと言っていいと思います。

けれども私たちは最初からイエス様を特別視するという感覚でこの言葉を読みますから、この言葉をイエス様だけの言葉のように私たちは聞くことになってしまっていますけれど

も、「わが神、わが神、どうしてわたしをお見捨てになったのですか」という、この叫びをあげた人は、もう数限りなくいるわけです。先ほど申しましたベツレヘムで自分の幼児を虐殺された母親とか父親とかその家族は、「神様、どうしてこんなひどいことを見過ごしにされるのですか」と、本当に皆が泣き叫んだと思うのです。そして皆さんも何回も聞かれておりますように、この叫びは詩編 22 篇の冒頭の一句だということでもあります。ですからこれはイスラエルの民が、「わが神、わが神、どうしてわたしをお忘れになったのですか。顧みてくださらないのですか。お見捨てになったのですか」と、聖書を読んだらそういう叫びで満ちているわけです。

そしてこれは何もイスラエル特有の事ではなくて、この歴史の中で、私たちのこの人生で、身近なところでも、「どうしてですか？ どうしてこんなひどい事が起こるのですか？」どこにその憤りをぶつけていいかわからないような、ひどい、たちの悪いそういう事態が私たちの身边にも起こるわけです。ですからこの言葉はイエス様特有のものではない、イエス様だけのものではないということですね。どれだけの人間が酷い苦しみに遭わされたかしのれない。イエス様も人としてばそういう世々の人々の叫び、これからもあるであろう無限の叫び声と一つになって、イエス様も今叫んでおられるのです。

ボンヘッファーは収容所にあっても王のように悠々とふるまっていたと言われますからやはり凄い人物だったのだなと思いますけれども、もしイエス様が、「わが神、わが神、どうしてわたしをお見捨てになったのですか」というこの叫びを発せられないで、ほかの何かで息を引き取られたというのであったら、私たちはイエス様という方を身近な存在、真に有難い方と思わないかもしれません。人間としてどうにもならない事が起こって私達は苦しむわけですが、それに関与しないような「救い主」というのであれば、これは救いにならないのではないのでしょうか。

ですから「償い」というその意味は、一つは、ご自分が犯した罪ではないけれども、ご自分も無関係とは言えない形で多くの者が虐殺されたその事を、負い目と言うのが適切とは言えないかも知れませんが、やはりその問題を解決しないではイエス様も死にきれない思いであられたと思うのです。ですから色々な形で、苦しい思いの中にいる人が大勢いる。そのような人たちに出会う時、その人を助ける。何があっても助ける。それを「償いの業」と言ったのでは不十分ですが、深い償いの意味があると思います。

そういうことで、イエス様という方は、先ほどのヘブライ人への手紙の 4 章の 14 節以下のところをもう一度読みますと、口語訳ですが、「この大祭司は、わたしたちの弱さを思いやることのできないような方ではない」のです。ですから、どんな人間の痛み、苦しみも、それを共に苦しんでくださる方なのです。そして、「罪は犯されなかったが、わたしたちと同じように試練に遭われたのである」と続きます。ですから人間が経験する試練で、イエス様が遭わなかった試練は一つもないということをはっきり言っています。しかし、「イエスは罪は犯されなかった」のであります。これは先ほど申しましたように、百卒長の「この人は本当に神の子であった」という告白、「この人には罪はない」という総督ピラトの言葉などが示しているところであります。

今日の聖書の箇所では、「イエス様が大声を出して息を引き取られた。すると、神殿の垂れ幕が上から下まで真っ二つに裂けた」と、こういうことが何気なく書かれていますけれども、エルサレムの神殿の一番奥が至聖所、その手前が聖所で、その間にこの垂れ幕が下がっていたようですが、この至聖所には、年に一度、「贖罪の日」に大祭司が入る。それは人間が犯した罪の贖いのために、贖いの動物、牛、羊、山羊を大祭司がそれを供えて、贖罪の儀式を行う。自分たちの犯した罪、或いは気がつかないで犯しているかもしれない罪をお赦し下さいという国家的な儀式が、贖罪の日として、当時は7月、今は1月10日に行われる。そういう「贖罪の日」というのがあるのですが、その時に大祭司が一度だけこの至聖所に入って行くことができますのです。その幕が上から下まで真っ二つに裂けた。当時なら人間・大祭司も罪を犯すわけですし、民も罪を犯す、その贖いの供え物として動物を身代りに献げるのですけれども、今やイエス様の十字架におけるこの死は、ただ一度で完全な永遠の贖いの供え物なのだということ、正に完全な償いの死なのだということ、この幕裂けという表現は表わしているわけです。そしてこの罪無き方の全き贖いによって、われわれ人間の罪が赦されるのだということ、この垂れ幕裂けは語っているわけです。

そういう意味においてイエス様の十字架の死とこの叫びにこめられているものは、それは「償い」ということなのです。そして本当の償いというのは、罪の無い者が代ってそれを負うということがないと、被害を受けた者の痛みはつぐないきれないわけです。私たちがイエス・キリストの十字架に思いをいたす時に、どうにも理不尽と思える事柄があるのに、そこに心が和らぐというか、おだやかになるというか、そのことから解かれるような解放感を味わうことができるのは、何故なのかと言えば、この罪なき御方が罪の償いにご自身を捧げて下さったことの故にではないでしょうか。

今日はミケランジェロのシスティーナ礼拝堂のことではないのですが、ミケランジェロの実力というものに私も初めて触れて、これほどの人を今までよく知らなかったというのはこちらが怠慢なんですけれども、その後いろいろ見ていましたら、ミケランジェロがあのシスティーナの礼拝堂の天井の壁画を描いたのですけれども、彼が終世こだわったものは何だったかと言えば、あれでもなくこれでもなくというとおかしいですが、ピエタです。彼は彫刻家なんです。23歳の時に、聖ペテロ寺院にある大理石のピエタ、今は写真で見ただけですが、それを造って、彼の実力が世に認められたのですが、彼は生涯に四つのピエタを制作しているのです。そして最後のピエタは未完に終わっています。いずれにせよ彫刻というのは凄いですね。大理石があって、その中にマリヤと主イエスがいて、それを削り出すというか、掘り出すわけですよ。画面に絵を描くのと全然違う作業で、ちょっと欠けてもおしまいじゃないですか。彼は89歳の割合に長生きだったのですけれども、最後ピエタは、腰が曲がって、頭も上がらなくて、視力を失って、それでも手さぐりで鑿(のみ)を振ってピエタ制作に全力を傾注した。遂に病気で亡くなる4、5年前、力が尽きて、4つ目のピエタは未完に終わるのです。

それは最後のピエタなんです、それを今回インターネットで見まして、また大いなる発見がありました。最初の23歳で造ったピエタのあのマリヤさんのきれいなこと！若々し

くて、十字架から降ろされたイエス様を抱いておられる。けれども最後のは、二人とも立っているのですね。マリアさんが後ろに立ってイエス様を支えている。そしてイエス様も立っているというもおかしいのですけれど、マリヤは脇を抱えるようにしているのです。それは一見マリアさんがイエス様を抱き支えているのですが、イエス様がマリアさんを背負っているようにも見えるわけなんです。こういう二つの意味を持たせているらしいという解説もありましたけれども、そこにミケランジェロが最後に、彼があらわしたかったことがあるのだと思うのです。本当に悲しみのピエタ像なんですけれども、その痛み悲しむ母マリア、一人の婦人を死力を尽くしてというか、もうイエス様は死んでおられるのですが、そのイエス様がマリアさんを背負って、導こうとされているようにも見えるのです。正に天の安息にマリアさんを背負って行くという、そういうピエタ像が未完で終わっているんですね。

だからイエス様のこの、「わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか」という叫びは、こういう叫びをあげた人々、また我々と一体になりつつ、罪なき御方が、どうしても罪の償いをし切れない我々人間のために、我々に代わってそれを償い、我々を解放、自由、安息へと導き上ってくださるこのイエス様の償い、それが叫び、或いはその前後の幕が裂けたとか、「本当にこの人は神の子だった」と、本当にちょっとした描写表現ですけれども、これが今申したようなこと、そして皆さんも心に色々な思いが湧きあがっていると思いますけれども、そういうものを表現しているのではないのでしょうか。

そういうわけで、イエス・キリストという御方は、本当に私たちが導かれて、結ばれて、離れ難くされて、そして私たちが忘れようが何をしようが、決して捨てたまわれない、離れたまわれない。そしてくず折れる私たちを背負って、救いを全うしてくださる。これがやはり、わたし達が、「救い主イエス・キリスト」と信じ仰ぐお方の尊い贖いの御業であります。

お祈りいたします。

憐み深い主イエス・キリストの父なる神様。

まことに思い至らぬ、弱く、小さく、且つ罪深い者でありますけれども、あなたの御憐みが尽きないゆえに、生かされ、導かれ、また力を与えられて、歩みを進め得ますことを、感謝いたします。

どうか、私たちのこれからの歩みがイエス様を仰ぎつつ、できるだけ罪の少ないもの、そして罪ゆえの様々な苦しみが和らぐための償いの業、奉仕であり得ますように導いてください。

この祈り、主イエス・キリストの御名を通し御前におささげいたします。アーメン